

## 書物を焼くの記事

鄭 振 鐸

まず、勝利後一年間の情勢を、ふりかえってみよう。

西部地区から、東南に、華北に、華南にと、軍隊・官吏たちが、一群、一群、勝利とともに飛行機でかえってきた。まごころをこめて、かれらを熱烈に歓迎したのは、一般市民たちであった。裏面の矛盾や衝突などは、一般のものには想像もつかなかった。なんととっても、物価はさがるだろう、敵とカイライのひどい政治もなくなるはずだ、もうこれからは大丈夫だ、と、みんながよろこんだのだ。おもえばヌカよろこびに暮れた一カ月であった。

心いさんで「正義の軍隊」を出むかえた結果といえは、混乱きわまりない事態を、つぎつぎに見せつけられたことであった。接収がひきおこす混乱は、形容もできないほどひどいし、傍若無人な漢奸どもの跳梁も、あとをたたない。人民たちの一時に灼熱したまごころは、しだいにさめていった。あるときは党の機関が接収するかとおもえば、あるときは陸軍総部が統一的に接収するという。そうかとおもうと、いつのまにか、「敵偽財産処理局」という機関が設立される。たためちやくちやに、あちこち封印してあるくだけだ。しかも、封印してあるく人間がある一方、おなじ工場に、建物に、自由自在に出入する人間もいるのである。なかでも、多数接収された倉庫については、これがどう処分されたのか、その事情をしるものは、一般のものにはほとんどいない。どこでも接収されたたん、工場は煙突から煙がなくなる。機関・団体では、いつさいの機能がみんな停止してしまう。さまざま悪税についても、免除されるといわれていたのが、まもなく、また、もともにとつてしまう、という状態であった。しばらくたつてみると、いろいろな現象は、敵とカイライの時代よりも、もつと乱雑で秩序がなくなつたようにみえてきた。人民たちの苦痛は、一向にとりのぞかれない。それに、物価がものすごいいきおいで上りはじめた。ホツと一息ついたばかりの民衆たちは、ふたたび眉をしかめ、災難がちかづいてきた、と感じるようになった。幾百万の戦災者たちは、家にかえりたくても、かえるすべがなかった。かれらは、戦時中とおなじように流離の生活をつづけているのに、だれも、かれらをかまうものはいない。

最初に「接収」の一団がついたあと、ついで憲兵隊が来、それから、多くの名もしれない地下工作員と称するものがかえってきた。かれらは封印してある物資を、うばいとつた。

〔注〕鄭振鐸「書物を焼くの記事」（一九五四年岩波新書）より抜粋。

## 郑振铎日记

一九四五年

九月十日

“晨，森玉来，偕出访慰堂，遇之扬子饭店。谈甚畅。教部以‘京沪区教育复员辅导委员’名义予我，似觉无聊。”当时，教育部派蒋复璁（慰堂）为京沪特派员，在上海设办事处，组织“京沪区教育复员辅导委员会”，由蒋复璁兼主任委员，聘马叙伦、张凤举、许炳堃、郑振铎、刘英士、徐鸿宝（森玉）、叶风虎等为委员，研讨有关教育复员问题，备供参考。但不久，国民党加强控制，该委员会名存实亡。

九月十八日

“八时许，至风举处，皆至同文书院视察”，“三时许，至办公室，正在举行接受自然科学研究所会议。”

九月二十日

“晨出，至办公处，至同文书院接收，经过情形甚好，惟资料室已空，大是可惜”，“下午，至自然科学研究所视察，又至近代科学图书馆等处，均重门锁闭，无法入内。”

---

〔注〕書目文獻出版社「鄭振鐸日記」より同文書院接收關係事項抜粹。